

集団間対話を通じた異文化理解のプロセス

—日本・中国の大学間における交流授業の試み—

Process of Intercultural Understanding through Dialogue between Japanese and Chinese University Students

榑原知美 (東京学芸大学)

Tomomi SAKAKIBARA (Tokyo Gakugei University)

片成男 (中国政法大学)

Chengnan PIAN (China University of Political Science and Law)

高木光太郎 (青山学院大学)

Kotaro TAKAGI (Aoyama Gakuin University)

<要約>

本研究では、日本と中国の大学間における手紙形式のレポートを用いた交流授業を実施し、異文化集団との対話を通じた日本の学生の異文化理解のプロセスについて検討することを目的とした。交流授業は「車内での携帯電話の使用」というテーマで、合計6回（日本3回、中国3回）にわたり実施された。初回授業においては、日本（東京）では車内での通話は禁止されているが、中国（北京）では容認されているという現状について説明した後、通話を控える利点や不便な点などについて学生に考えさせた。具体的には、学生個別の意見の記述、グループ討論、グループごとの中国への質問・意見の記述を行った。学生の記述は、翻訳のうえで中国の学生に配布された。これに対する回答が日本に返送されるという形で対話が進められた。日本の学生の記述から、中国との対話を通して、自文化を基点として相手文化を理解しようとする視点から、行為の背景にある文化的信念の相対性を尊重して相手と対話をする視点へと変化したことが示された。また、学生の異文化理解の変化には、異文化の価値や信念に対する情動反応が影響することが示唆されたことから、今後の交流授業の課題として、学生が自身の情動反応により明確に気づくことのできるテーマをとりあげていくことが見出された。

*キーワード：対話、異文化理解、中国、大学生、交流授業

1. 本論文の目的

現代社会では、国家間、地域間、あるいは文化間における様々な齟齬や軋轢に対応することが求められる。このような異文化理解の問題を「個人の文化適応」や「個人間の関係調整」のレベルではなく、個人の多様性を前提としつつも、それを越えた集団的なレベルでの関係調整過程として捉える必要性が増している。個人は

文化的な共同性を持った集団に所属し、そこでの相互行為を通して様々な認識や行為様式を生成・共有・維持し、それらに基づいて文化的他者とのコミュニケーションに参入する。この点で異文化間における関係調整は、直接的には個人間で展開するものであっても、集団間の水準で展開する関係調整という側面を常に持つからである。

われわれはこのような視点に基づき、2010

年から2012年までの3年間の計画で、日本、中国、韓国、ベトナムの大学授業間を結び対話型の授業実践を行う国際共同研究プロジェクトを実施している⁽¹⁾。本プロジェクトで実施している交流授業の基本的な構成は、山本・伊藤(2005)が提案する「円卓シネマ」のスタイルを基盤としている(伊藤・山本, 2011)。これは例えば中国で制作された映画を日本と中国の参加者グループが鑑賞し、そこで見いだされた共感や違和感について語り合うという方法である。本プロジェクトでは、この方法が「個人の異文化理解」「同一文化集団による対話」「異文化集団との対話」が重なりあう重層的な集団的対話構造の創出に有効であることは認めつつも、映画の鑑賞に時間がかかるため通常の大学授業での実施が困難であること、映画の作者の価値観や主張に議論が強く影響されてしまう場合があることなどを考慮し、よりシンプルな討論の素材を用いて文化的差異に定位した集団間対話構造を創出する授業実践の開発を試みている(呉・高木・伊藤・榊原・余語, 2012)。

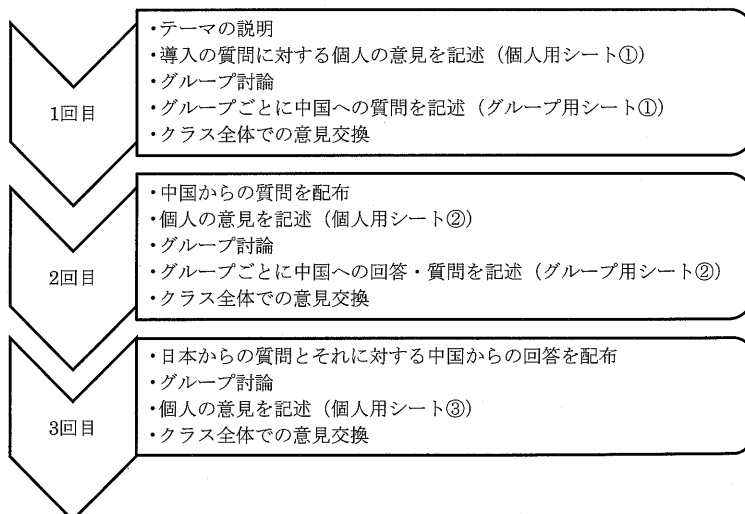
本論文では、まず国際共同研究プロジェクトの一部として実施された、日本と中国の大学間における手紙形式のレポートを用いた交流授業

を取り上げ、そこでの具体的な試みについて説明する。そのうえで「異文化集団との対話」のレベルに焦点をあて、中国とのやり取りを通して日本の学生に生じた異文化理解のプロセスについて検討する。

2. 日中交流授業の実施

本交流授業は、2011年5月から6月にかけて、合計6回(日本3回、中国3回)にわたり、東京と北京の大学における通常の学部授業の一部として実施された。テーマは「車内での携帯電話の使用」とした。授業の概要を図1に示す。授業内容は日本と中国では基本的に同じものを実施した。授業の履修者数は、日本は25名で、中国では6名であった。本論文では、日本の授業の履修者のうち、データ使用の同意が得られなかった2名と中国人留学生1名を除いた22名を分析の対象とした。各授業に出席した対象者の人数は、1回目18名、2回目22名、3回目19名であった。授業中に学生が書いた手紙は翻訳担当者により翻訳され、相手国の授業で使用された。中国語から日本語への翻訳は、中国在住6年の北京師範大学の日本人研究者が行った。日本語から中国語への翻訳は、第2

図1 日中交流授業の概要



著者である片成男が担当した。また、1回目授業のはじめと3回目の最後には、事前・事後アンケートをそれぞれ実施した。事前アンケートは中国への渡航経験や日中の車内マナーに対するイメージ、車内でマナー違反と感じる行為などに関する5項目で構成された。事後アンケートは車内マナーや授業の感想などに関する5項目で構成された。交流授業における学生の討論の様子は、ビデオカメラおよびICレコーダーを用いて記録した。

以下、交流授業の内容について、詳しく説明する。

1 回目交流授業

本交流授業では、まず準備として、国際共同研究の趣旨説明とデータ使用に関する同意を得た後、学生をグループに分けて写真撮影を行った。1回目授業における各グループの人数は中国と対応させる形で5～6名とし、その結果、4つのグループが出来た。グループメンバーは3回の授業を通して固定としたが、2、3回目授業から新たに出席した学生を各グループに加えたため、最終的には各グループの人数は6～7名となった。写真撮影は中国と交換することで、学生が交流相手に親しみを持つことをねらいとした。

交流授業では、はじめに討論のテーマが「車内での携帯電話の使用」であることを学生に伝え、日本と中国における車内での携帯電話の使用の実態について簡単に確認・説明した。具体的には、日本（東京）では、「優先席付近では携帯電話の電源をお切り下さい。それ以外の場所では、マナーモードに設定の上、通話はお控え下さい」というアナウンスが流れるなど、携帯電話での通話は禁止されているが、中国（北京）では、通話を制限するアナウンスや携帯電話での通話は控えるべきという共通認識はなく、人々は普通に通話しているのが現状であること

を説明した。説明の際には、中国における車内のイメージを学生が持ちやすいように、日中のバス・電車の外見および内部の写真を学生に提示した。

その後、議論の手がかりとなる「導入の質問」を学生に提示し、それらの質問に対する意見を個別に記述させた（個人用シート①）。導入の質問は、次の3点であった。1. バスや電車において携帯電話での通話を禁止または控えることには、どのような利点と不便点があると思いますか。2. バスや電車における携帯電話での通話がみとめられるとしたら、あなたはこのことに賛成ですか、それとも反対ですか。なぜですか。3. もしあなたが中国に行ったら、バスや電車において携帯電話での通話を控えますか。

個人用シート①への記述を通して、導入の質問に対する自分の考えを整理させた後、グループに分かれて自由に意見交換を行った。その後、グループでの議論を踏まえて、中国の学生に質問したいこと、確認したいこと、コメントしたいことなどを3点にまとめて、それぞれ300字程度でグループごとに記述させた（グループ用シート①）。記述の際には、手紙をイメージして相手に語りかけたり質問したりする形式で記述すること、中国の学生が質問の意図を理解しやすいように質問の背景や理由なども合わせて記述すること、を学生に促した。また親交を深める場として、グループ用シート①の最後に設けた「中国の学生への一言メッセージ」欄への記述も促した。グループ討論と記述に要した時間は約30分程度であった。

最後に、各グループでの討論内容をクラス全体で共有し、1回目の授業を終了した。クラス全体でのまとめの際には、担当教員のコメントなどが日中の学生の対話を方向づけることがないように配慮した。

授業終了後には、学生の写真と名前、個人用シート①、グループ用シート①の3点をスキャン

キャンし、翻訳担当者に送った。本交流授業では翻訳の負担を考慮し、中国のグループ数と対応させる形で、クラスの意見が幅広く含まれている1グループ分を選択して、翻訳・交流の対象とした。残りのグループのデータについても、一部翻訳され補助資料として中国で用いられた。

2 回目交流授業

1 回目授業での議論についてクラス全体で簡単に意見交換した後、中国から届いた質問やコメント（グループ用シートと個人用シート全員分）を学生に配布し、各自考えたことを個人用シート②に3点にしぼって記述させた。本交流授業では、中国からの質問やコメントは全て、日本語（翻訳）と中国語（学生の直筆）を両面印刷の表裏で対応させる形で印刷し、配布した。中国の学生の直筆を添付することで、学生が対話相手の存在を実感できるようにすることをねらいとした。

その後、対話の相手である中国の学生の顔写真と名前を紹介した後、グループに分かれて意見交換を行った。グループ討論の進め方は、1 回目授業と同様、グループごとに自由に行うように指示した。その後、グループにおける議論を踏まえ、グループごとに中国からの質問やコメントに対する回答を3点にまとめて記述させた。さらに、中国の学生に質問したいこと、確認したいこと、コメントしたいことなども3点にまとめて、それぞれ300字程度で記述させた（グループ用シート②）。

最後に、各グループでの討論の内容をクラス全体で簡単に共有して、2 回目の授業を終了した。授業終了後には、グループ用シート②と個人用シート②の2点をスキャンし、翻訳担当者に送った。

3 回目交流授業

1 回目授業に交流対象となった日本のグルー

プが記述したグループ用シート①と、そのメンバーが記述した個人用シート①を全員に配布し、日本から中国に送られた質問やコメントを確認させた。その後、中国からの回答を配布した。3 回目授業では討論の時間を確保するために授業の手続きを変更し、はじめにグループ討論を行った後で、個人用シート③に個人の意見や感想を自由に記述させた。

最終回にあたる3 回目授業では、最後に、これまでの中国とのやりとりの中で浮かび上がってきた示唆を2点提示し、クラス全体で意見交換を行った。

3. 中国とのやり取りを通して生じた学生の異文化理解プロセス

以下、交流授業における学生の記述（個人用シート、グループ用シート、事前・事後アンケート）を分析し、中国とのやり取りの過程で生じた日本の学生の認識の変化について検討する。なお、グループ用シートについては、データ使用の同意が得られなかった学生2名が含まれる1グループを除いた、3グループを分析の対象とした。

交流前の学生の認識

事前アンケートの結果から、交流授業に参加した学生のうち、実際に中国に滞在した経験がある学生は3名とごく少数であり、滞在期間も最長で2週間と短いことが確認された。これらの学生に、日中の車内マナーに対するイメージについて質問したところ、日本の車内マナーについては、多くの学生（11名）が概ね良いと感じていた（例えば、「多くの利用者は、周囲の人に迷惑をかけないようにしている。一部の人は、通話したり大声で話したりするが、全体的にはマナーはよいと感じる」）。中国については、「自由・マナーに厳しくない」（5名）、「整列乗車しない」（5名）などがあげられた。

車内マナーが良くないイメージがあると回答した学生も複数みられた（例えば、「万博でバスに並んで乗るようにみんなで努力している映像を見た。実際に見たことがないから良く分からないが、マナーが良くないイメージがある」）。また、そのような中国に対するイメージはテレビや映画などのメディアを通して得たものであることが報告された。

バスや電車などを利用する際に最もマナー違反であると感じる行為についても質問したところ、優先席に対象外の人が座ったり、対象者が来ても席を譲らなかつたりする「優先席」(5名)に関わるものが多くあげられた。マナー違反であると感じる上位3つの行為を合計したところ、「携帯電話での通話」(11名)が最も多く指摘され、次いで2人分の席に1人で座るなどの「席を詰めない」(7名)行為、「優先席」(5名)などがあげられた。ここから、本交流授業のテーマである「車内における携帯電話での通話」について、そのような行為はマナー違反であるという強い認識を日本の学生が共有していることが明らかになった。

自文化中心の視点と評価

車内での通話は控えるべきであるという学生の認識は、1回目授業での学生の記述においてもみられた。個人用シート①における記述では、大多数の学生(15名)が車内での通話を許可するのは反対であると述べ、その理由として「通話されると煩わしい」「他人の会話を聞きたくない」「公共の場は静かであってほしい」などがあげられた。さらに、約半数の学生がたとえ車内での通話が許されている中国に行ったとしても自分は通話を控えるだろうと回答した。

車内で通話を控えることの利点や不便な点などについても考えさせたところ、車内で通話を控えることの利点としては、「ペースメーカーをつけている人への配慮」が最も多く6名の

学生に指摘された（例えば、「近くにペースメーカーを使用している人がいるかもしれない、その人たちにとって携帯の電磁波は命取りになる可能性があるため、そんな状況を回避できる」）。次いで「車内放送が聞こえる」(6名)、「個人の時間をもつための静かな環境を確保できる」(5名)、「周囲の迷惑にならない」(4名)があげられた。車内で通話を控えることの不便な点としては、「緊急の電話」に対応できないことに関わるものが最も多く、16名の学生に指摘された。

このような学生の主張は、中国への質問にも一貫してみられた。車内での通話が許されている中国の現状を踏まえて、グループごとに中国への質問を記述させたところ(グループ用シート①)、車内での通話は控えるべきであるという日本におけるマナーの観点から、中国人の認識を問う質問が数多くなされた。例えば以下の質問では、中国には日本と同じように車内での通話を控えようという意識を持っている人はどの程度いるのか、車内で通話をする理由、日本に来て通話をしたいと思うか、などが質問された。

【日本からの質問例1】

(グループ用シート①)

- ・「日本では電車やバスに乗るときマナーモードにしようと思うのが当たり前ですが、中国ではこのような意識を持っている人はどのくらいの割合でいるのか」(グループ #3)
- ・「また、根本的な問題として、通話を車内までしなければならぬ理由を伺いたいです。日本ではあまりにも習慣が身に付いてしまっているために、特に車内で通話をする必要性を感じられません。中国ではどうして車内で通話するのでしょうか」(グループ #2)
- ・「日本では原則禁止となっていて、車内

での通話は白い目で見られますが、それでもあなたは日本に来た場合、通話しますか」(グループ #1)

また、3つのグループ全てが、日本におけるペースメーカーを装着している人々への配慮に言及し、そのような人々に対する中国での配慮について、以下のように質問した。

【日本からの質問例 2】

(グループ用シート①)

- ・「ペースメーカー、目の不自由な人のことを考えてアナウンスが聞こえなくなないように、電話を控えています。中国ではそういう人々への配慮や優先席などの設置はありますか」(グループ #1)
- ・「携帯電話を使用しない理由の一つに、ペースメーカーなどの医療機器を身に付けている方に対して配慮をすることが挙げられます。特に優先席付近では通話はもちろん、電波を飛ばすこと自体やめるように心がける人が多いです(現在ではこの限りではないですが)。中国ではこのような人々に対して、どのような配慮を考えていますか」(グループ #2)
- ・「日本ではペースメーカーをつけている人を思って、優先席付近では電源を切るように促されるのですが、中国ではどうなのか」(グループ #3)

以上のように、交流前に学生が中国にした質問は、車内で通話を控えるのは「当たり前」であり、医療機器を装着している人々に対する配慮という意味でも正しいことであるという信念にもとづいたものが大多数であった。そのような視点から、車内で通話する中国の人々の行為や意識を批判的なニュアンスを含めて確認する質問もみられた。日本の文化集団内での対話の

構造が、中国とのやり取りにも当てはめられた。

ズレの気づきと文化的信念の顕在化

2回目授業では、日本では車内での通話が禁止されていることを知った中国の学生から、以下の3つの質問が届いた。

【中国からの質問】

(中国グループ用シート①)

- ・質問 1 「中国では、私たちはバスや地下鉄で携帯を使ってよくて、携帯での通話を禁止するアナウンスもありません。従って、日本の状況について理解していません。このため、私たちは日本の公共交通機関での携帯の使用状況がどうなのか、理解したいです。もし誰かが電話したら、そばにいる人は、どのような行動や心理的な反応をするのでしょうか？」
- ・質問 2 「もし長時間公共の交通機関に乗っていて、緊急の事態が起きたり、重要な電話があったらどうするのですか？ 従事している職業によっては、24時間電話を受ける(電話を待つ)必要があるものもあり、では、そういう職業の人は、長時間乗るような公共交通機関あるいは地下鉄は選ばないのですか？」
- ・質問 3 「こうした規定《きまりごと》を遵守する動機はどういったものですか？ 習慣でしょうか？ あるいは他の人に迷惑をかけたくないのでしょうか？ 公共交通機関が公共の場所だとしたら、どうして電話をしないのでしょうか？ 他の公共の場所ではいつも電話をしないのですか？ (私たちは公共の場所ではいつも電話をしてもよいはずだと考えています)」(訳者注：下線部の「迷惑」は、直訳すると「影響」)

これらの質問に対する各自の意見を個人用シート②に記述させたところ、質問1に対しては、日本の現状について、車内で通話している人がいたら不快に感じ(9名)、白い目でみたり(12名)、注意する人もいる(9名)などと説明された。質問2については、緊急の事態にはメールを使用したり(6名)、途中下車(6名)などの形で対応することが説明された。質問1と2に対するこのような学生の説明は、グループ討論後のグループ用シート②における記述にも反映された。以下に回答例を示す。

【日本からの回答例1】

(グループ用シート②)

- ・「その人が非常識だと思う。注意する人がいるし、マナーを守っていないことに激怒する人もいる」(質問1, グループ#3)
- ・「白い目で見ます。中には注意をしてく人もいます。まじむかつく」(質問1, グループ#1)
- ・「『電車の中なので』と言えば相手も納得してくれる。何回もかかってくるのが緊急性を伝えている。メールで済ませてしまう場合も多い。地下鉄は電波が届かない。どこでも『公共機関はダメ』というわけではない」(質問2, グループ#2)

質問3では、日本において車内での通話を控える理由について質問されたが、多数の学生が日本文化という視点から、他者の迷惑を考えた行動や他者に配慮することの価値に言及した(11名)。同様に、グループ用シート②での記述においても、3つのグループ全てが、日本では公共の場において身勝手な行動を慎んだり、他人に迷惑をかけないことが重視される点に言及した。以下に、個人用シート②とグループ用シート②における記述例をそれぞれ示す。

【日本からの回答例2(抜粋)】

(個人用シート②・グループ用シート②)

- ・「このような規定となった詳しい背景はわかりませんが、やはり他の人に迷惑をかけないようにするというのが根本としてあるのではないかと思います。よく言われる日本人の譲り合いの精神の一つではないかと思います。人に迷惑をかけてまで通話をするなら最初から通話しないという考えになっているからなのではないかと思います。」(質問3, 学生#5)
- ・「公共の場で自分勝手な行動を慎んだり、相手、周りの人間に配慮するのが日本人の美徳なんだと思います。全ての人間が決まりを守るわけではないので、電話をする人も確かにいますが、禁止されているのでほとんどの人はしません。もし全員がしたら、とても騒がしいし、周りの人に不快をもたらすでしょう。」(質問3, 学生#12)
- ・「日本では公共の場は自分のものとは考えず、身勝手な行動はマナーとして許されない。皆が快適に過ごせる場であることが大切」(質問3, グループ#1)

グループ用シート②では、さらに中国からの質問を受けて生じた疑問やコメントを記述させた。ここで学生は、中国の現状に関する質問(例えば、「メールは使わないのですか」)に加えて、中国の「私たちは公共の場所ではいつも電話をしてもよいはずだと考えています」という記述に注目し、日本と中国における公共のとらえ方にズレが存在する可能性についても指摘した。

【日本からのコメント例】

(グループ用シート②)

議論にもなりましたが「公共」という考

え方にズレが起こっているのではないかと
思いました。このグループでの「公共」の
定義は「どんな人でもその場所にいること
ができる」としました。また公共空間なら
ばどんな場所でも電話をしないのではあり
ません（細かい場合分けの大まかな基準は
「騒いでも許されるかどうか」でしょう）。
ただし、電車内で電話を「かける」人は日
本ではまずいません（グループ #2）。

公共の場では電話をしても構わないはずであ
るという中国の学生の信念が提示されたことで、
中国において車内での通話が許されている背景
には、自分たちの信念とは全く異なる信念があ
ることに日本の学生が気づき、異文化の存在を
意識するようになったことが考えられる。その
結果、自分たちの行為や信念についても、普遍
的なものとして捉えていた交流前の視点から、
質問3への回答にみられたような日本文化と
して枠づけて捉える視点に変化したのだろう。

文化的信念の相対化

3回目授業では、1回目授業で中国に送った
質問に対する回答が届き、公共空間に対する日
本と中国の考え方の違いがより明確になった。
日本の学生が公共の場所を他者に配慮する場所
であると位置づけたのに対し、中国では公共の
場所は自由な場所であり他者の目を気にするこ
とはないと考えられていることが説明された。
以下に、中国からの回答を示す。

【中国からの回答】

（中国グループ用シート②）

- ・回答1「私たちが家の門を出れば、そこ
は公共の空間なのであり、とても自由な
場所で、一般的には他の人が何をしよう
と干渉したりもしません。公共の空間は
とても大きく、とてもにぎやかです。私

たちの意識の中では、自分の行為が、他
の人に注目されている《気にとめられて
いる》ことはないだろう、と想着ていま
すし、他の人に深いレベルで心理的な影
響を及ぼしたりはしないだろう、と着て
います。私たちは《これは》一種の集
合的無意識だと思着ています」（日本か
らの質問「中国では公共空間についてど
のような感覚をもっていますか」）。

- ・回答2「私たちには「老幼病残孕専席」
《老人・幼児・病人・障害者・妊婦の優
先席》があります（日本から質問「中国
では医療機器などをつけている人々に対
してどのような配慮を考着ていますか」）。
- ・回答3「私たちは、車内で電話をする理
由が必要ない、というわけでは決してあ
りません。ただ、車内でもし電話がかか
ってきたら、私たちは電話で話します。
《つまり》ただ、必要な状況で電話する
だけです。私たちは、車内にいる時と他
の場所にいる時で、あまり大きな区別は
ないと考着ています。」（日本からの質問
「通話を車内までしなければならぬ理
由を伺いたいです」）

中国における公共空間の捉え方については、
中国の学生が個別に記述した個人用シートにお
いても以下のように詳しく説明された。

【中国からの回答（補足）】

（中国個人用シート②）

- ・「中国の公共の空間は、特に大都市では、
人口密度が非常に高いです。人がやって
くるところ《故郷、出身地》も非常に様々
で、私たちはただ自分の行為について
のみ請け負う《責任をもつ》ことができる
だけで、《他の人に》要求することもで
きないし、また他の人の行為について

《何らかの》要求を行うといった可能性
もありません」(中国学生 #5)

- ・「日本では閉じられた公共の空間を非常に気にするのですか？ 私は公共の場でこんなに多くの決まりごとがあれば効率に影響することもあるし、あまり自由ではない気がします。公共の空間である以上、それぞれの人が自分の事をする権利をみな持っているでしょう。デパート《やスーパーなどの比較的大きなお店》も閉じられた公共の空間ですが、どうしてデパートでは騒がしくすることを禁止したり、あるいは携帯の使用を禁じる決まりがないのですか？」(中国学生 #6)
- ・「中国では、そうした「閉ざされた公共の場所では静かにしておく必要がある」といった習慣はほとんどありません。私自身は日本の学生のような感想——公共交通機関の車内では誰かが話すとてもうるさく思えるだろう——は持っていません。私は公共の場所であるからには、それぞれの人がみなほかの人のいくつかの行為に対してはある程度許容すべきだと思いますし、ただそうした行為が法律と道徳の限界を超えなければ、受け入れてもらえると思います」(中国学生 #4)。

さらに中国のグループ用シートでは、これまでのやり取りで生じた新たな疑問やコメントとして、日本において車内で通話を控える理由が合理性に欠けているのではないかという趣旨の指摘がなされた。個人用シートにおいても同じ内容のコメントがより詳しく記述されていた。以下、個人用シートにおける学生のコメント例を示す。

【中国からのコメント例】

(中国個人用シート②)

- ・「非常に多くの学生のみなさんが、医療機器を携帯した乗客について言及していました。日本では、まさかこうした乗客が非常に多いというわけではないですよね？ 判断を行う前に、利点と弊害をてんびんにかけて考える必要があると思いますが、このような人は多いのでしょうか？……特殊な人たちへの配慮のみを考えて、特殊でない一般の人たちの利益を犠牲にすることは、それもまたあまりよくないことではないでしょうか。」(中国学生 #3)
- ・「何人かの学生のみなさんが公共交通機関の車内では話をしているということを言っています。では、特別席から離れた場所ではどうして電話を受けてはいけないのでしょうか」(中国学生 #4)
- ・「車内では話をしてもいいが電話をしてはいけないというのは、電話を禁止するというのが、ただ医療機器をつけた人に影響するのを恐れて、ということだけを意味しているのではないですか？ もし静かな環境をつくるためというなら、どうして話はしているのですか？ これは矛盾していないのでしょうか？」(中国学生 #6)

以上のような中国からの回答・コメントを受け、3回目授業ではグループ討論後に、各自考えたことを自由に記述させた(個人用シート③)。さらに、クラス全体での討論を経て、事後アンケートを実施した。自由記述に時間がかかったことと、討論における学生の発言が相次いだため、事後アンケートはごく短時間での実施となった。そのため事後アンケートについては、最

も記述が多かった「3. この授業を通して、バスや電車におけるマナーについて、新しい考え方を得ることは出来ましたか。あれば教えてください」における学生の記述のみ検討する。

個人用シート③と事後アンケートにおける学生の記述からは、中国の学生とのやり取りを通して、自分たちが日常生活のなかで当たり前であると考えていたマナーについて、その理由や意義を問われ、困惑・葛藤する様子が伺えた。以下は、事後アンケートにおける学生の記述例である。

【日本の学生の感想例 1】

(事後アンケート)

- ・「新しい考えというよりか、ペースメーカー持ちの人をあまり見たことがないのに、何故このような場面での理由にあげられるのかという疑問が新たに生まれた」(学生 #5)
- ・「なぜ私たちは、いつから、何のために通話を控えているのか、という疑問。文化的な違いは、こういったマナーにも影響している」(学生 #8)
- ・「中国からの意見を聞いて、なぜ日本では車内で電話してはいけないのか、よく分からなくなりました」(学生 #9)

また、多くの学生は矛盾を指摘されて困惑し、その理由について新たな解釈を試みた。交流前は多数の学生が通話を控える合理的な根拠として、ペースメーカーに対する影響をあげていたが、中国からの矛盾の指摘を受け、このような説明は行われなくなった。また、ペースメーカーへの影響に代わる他の(合理的)説明が試みられることもなかった。それに代わり、学生たちによる説明の多数を占めたのは、他者への配慮、静けさを好む、礼儀を重んじるといった日本の文化的特徴を提示するというものであった。

例えば、以下の学生は、ペースメーカーを装着している人への配慮は表向きの理由であったことに気づき、新たな解釈を試みた結果、公共での行動を慎んだり、他者への気遣いが強い性質をもつ「国民性」という説明にたどり着いている。

【日本の学生の感想例 2 (抜粋)】

(個人用シート③)

- ・「日本にもペースメーカーをつけている人は、そんなにいないと思います。私たちは「電車やバスでは静かにする、電話はしない」というのが当然だと思っているので、「それは何故か」と聞かれても理由がないのでペースメーカーの話をしたんだと思います。結局日本の文化、日本人だから公共の場では色々な言動を慎むと思います。国民性ってやつです。うん、色々考えてたらわからなくなりました。いくら考えても国民性にしかたどりつかなかった」(学生 #15)
- ・「正直なところ、屁屁屈を言っているように聞こえた。結局は習慣の違いなのだと思う。何故? とか言うよりも、そういうものだからという感覚の方が大きいのではないのだろうか。……もともと静かな環境が好きなのと、他人への気遣いが強い性質を日本人が持っていることも大きな要因だろう。お互いに、国民性を理解できていないと感じた。そしてそれを理解するのは思ったよりも難しいことであるとも感じた」(学生 #7)

以下の学生もまた、日本において車内での通話を控える背景には、静かさや他者への配慮を重んじる日本の文化的側面の影響が強いと結論している。

【日本の学生の感想例 3 (抜粋)】

(個人用シート③)

確かに中国の学生から指摘された点に関しては、その通りだな、と思う部分がある。車内でお喋りすること、携帯電話で通話をするることによる周りに対する迷惑のかかり方は、ペースメーカーを使用している人々に対する配慮を除けば、変わらないし、かといってペースメーカーを使用している人が頻繁にいるわけでもない。そのような点を踏まえると、私は日本が車内での携帯電話のマナーについてうるさいのは、文化的側面が強いのではという結論に至った。まず、日本人は「礼儀」を重んじる。それは茶道や華道、武道などにおいてははっきりと表れている。これらに共通する「礼儀」として、私語等を慎む、すなわち静かであることが挙げられる。車内での携帯マナーについても同様な部分があると思う。私が特に思ったのは、アナウンスや貼り紙によるマナーの呼び掛けというものは、必ずしも「携帯の使用は迷惑だからやめよう」というものではないと思う。呼び掛けがしてあることで、たとえ車内で電話をしたとしても、その人は他の人に配慮をする。この、人への思いやりを呼び掛けたものに相違ないのではないだろうか (学生 #3)。

このように学生による説明が日本の文化的特徴に向かった背景には、2回目授業で日本と中国における「公共」のとらえ方が違うことについての気づきが生じたことが影響したと考えられる。3回目授業でも多くの学生がこの違いについて言及している。以下の学生は、日本と中国の公共の捉え方の違いを両文化における習慣の違いに結びつけて論じている。

【日本の学生の感想例 4 (抜粋)】

(個人用シート③)

- ・日本と中国で公共交通機関でのマナーが違うというのは、日本と中国の根本的な習慣や考え方が異なることから生まれてきた違いなのだろうと思った。中国人は家の門を出れば、そこは公共の空間であり、自由な場所であるという考えであるから、電車やバスの中であっても自分の自由にできるのであって、日本では公共の空間であるからこそ周りの迷惑にならないように気を配る(例えば車内での通話を控える)のだと思う。日本人からしたら、公共の空間はみんなが不快な思いをせず、気持ちよく居ることのできる(そうできるように配慮する)空間であり、自由に通話をしたりするのはプライベートな空間(もしくは公共の空間以外の場所)であると思っている(学生 #6)。
- ・日本と中国では「公共」という場に対する考え方の違いが大きいとおもいます。日本人が公共の場は公共の福祉を優先し、自分を抑えるのに対して、中国では公共の場ではそれほど他人に干渉せずに、自分の自由を優先するという考え方の違いに驚きました。私は中国に行ったことがないので、実際にどのくらい賑やかな場であるのかは分かりませんが、自分のやりたい事をそれほど抑えず、他人もそれを許容している雰囲気があるのだという事は分かりました。実際に、日本でもそれほどかたくなに皆がルールを守っているわけではないし、中国でも他人事を全く考えないというわけでもないと思います。実際に大きな差があるのは今まで続いてきた習慣の差(地理的条件からくる考えや文化の違いも関連してくると思い

ますが)であると感じました(学生 #20)。

ナーは、その国の文化とほぼ合致するのではないか(学生 #14)。

さらに、複数の学生の記述には、公共の捉え方の違いと文化的特徴を結び付けてとらえることから、さらに一步進んで日本と中国にみられる差異を相対的なものとして理解すべきであるという気づきも生じていた。このような例を以下に示す。

【日本の学生の感想例 5 (抜粋)】

(個人用シート③)

やはり、今回の問題で一番大きなポイントとなるのは、「文化・価値観の違い」だと感じた。例えば、〇〇さんの意見に、「中国人はにぎやかなのを好みますが……」という一節があったが、私達日本人では、基本的に公共の場では静かの方が好まれる。また、家から出たらそこは公共の場。個人の自由が尊重され、自分は他人の行動に干渉しようとしないうし、他人が自分の行動に干渉しようとしないうのが普通、との意見もあったが、日本の公共の場では、個人の自由よりも全体との調和が優先される。というより、日本人は自分の事よりもまず人の目を気にする、といった違いも挙げられる。今回の公共の場での携帯の使用について、日中どちらが正しいということはなく、お互いの文化、慣習の中での「当たり前」を理解することが大事だと思った(学生 #23)。

【日本の学生の感想例 6】

(事後アンケート)

両国のマナーが一元的に良い悪いではなく、人々が他者とどういふ風につき合っていくのかで、マナーが作られているのではないか。そして、その結果生み出されたマ

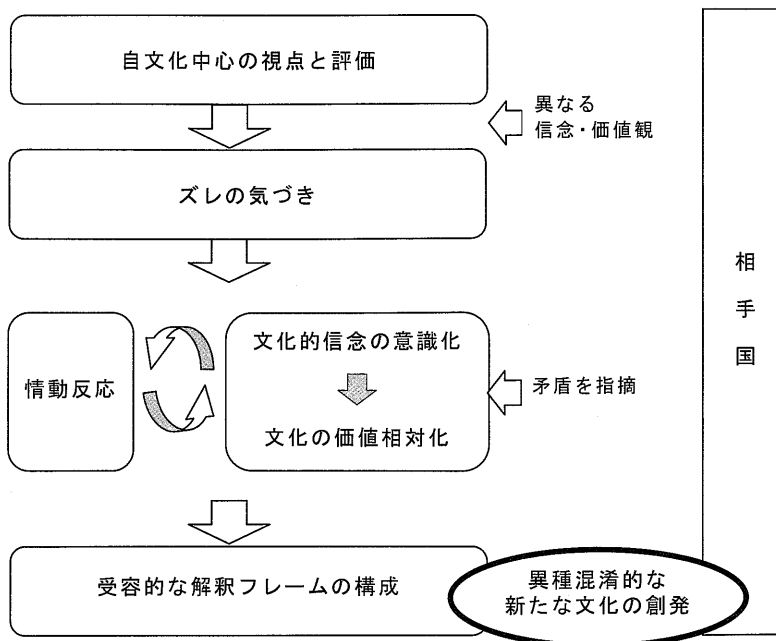
4. 考察

日中交流授業で生じた学生の認識の変化

本研究では、「車内での携帯電話の使用」というテーマで日本と中国の大学間における交流授業を実施し、そこで日本の学生に生じた異文化理解のプロセスについて検討した。交流開始前、日本の学生には日本のマナーとして常識的な観点から中国の人々の意識について質問するなど、自文化を基点として相手文化を理解しようとする態度がみられた。このような学生に対し、2回目授業では中国から、日本において車内で通話を控える理由についての質問がなされ、また公共空間では自由に振舞うことができるといった日本の常識とは異なる信念も提示された。これを受け、日本の学生は、車内で通話をするという行為の背景にある中国の信念が自分たちの信念とは全く異なることに気づき、自分たちの行為や信念についても、普遍的なものではなく、特定の文化に枠づけられたものとしてメタ的な視点から説明を試みるようになった。さらに3回目授業では、中国の学生から、日本の学生が行った説明に矛盾があるのではないかという指摘がなされた(例えば、なぜ優先席から離れていても通話は控えるべきなのか)。こうした質問に対して学生は困惑し、日本人は静かさを好む性質を持っているなど自文化の文化的特徴を根拠とする説明を試みる、日本と中国における公共の捉え方の違いなどを両文化の特徴の差異として説明する、両文化の差異を価値相対的なものとして捉えた説明をする、などの視点が生まれた(図2)。

本交流授業における以上のような対話の展開は、他文化との交流授業において、異なる信念や価値観が提示されたり、当たり前の行為に対

図2 学生の異文化理解プロセス



する合理的な説明を求められることによって、学習者が自身の信念や価値観の文化相対的な性質に気づき、それを反省的に捉え直す作業を開始することを示している。自分たちの信念が普遍的なものではなく、異なる文化における人々の行為は、自分たちとは異なる信念にもとづいている可能性があることを自覚して、他文化と対話ができるようになることは異文化理解における重要なステップの一つであると考えられる。

そこで、ここで生じた学生の認識と対話スタイルの変化をもう一歩深化させるために、われわれは（榊原と片），インターネットメディアを通して日本と中国の学生が直接的に討論を行う機会を追加で設けた。

Web 討論の実施

Web 討論には、日本から交流授業の受講者4名がボランティアで参加し、中国からは交流授業の受講者6名が参加した。討論には skype を使用し、通訳は第2著者である片成男が担

当した。討論は交流授業で行った手紙のやり取りを通して浮かび上がってきた疑問を相手に質問する形で、個人の体験談なども交えながら進められた。Web 討論に要した時間は約2時間であり、討論後には、学生に次の2点について記述させた。1. Web 討論を通して、バスや電車におけるマナーについて、新しい考え方を得ることはできましたか。あれば教えてください。2. その他、Web 討論に参加して感じたこと、気づいたことがあれば自由に記入してください。以下に学生の記述例を示す。

【Web 討論の感想例（抜粋）】
（追加事後アンケート）

- ・マナーへのとらえ方が違うのかなと思った。また、中国人の個人の自由観は強いように感じ「自分の道を歩け、人は気にするな」と助け合いの精神があると知った。公共の場でも自分がやりたいと思えば行動するし、迷惑をかけるという感覚

が日本人と差が存在し、迷惑をかけるからという日本の考えは完全には伝わらないと思った（問1，学生 #10）。

- ・「マナー」の違いから「マナー」って何だろうなと思いました。「マナー」は人を不快にさせるという点，例えば食べ物を食べてはいけないとかは一緒ですこし驚きました。たぶん、公共の場での喋るという感覚が大きく違うんだな，と思いました（問1，学生 #18）。
- ・「中国への勝手なイメージが形成されていたので，お互いに文面では伝わりきらないニュアンスが伝えられたのではないかと思う。しかし，根本的には理解できるけど納得しないというところがあったので，育ってきた環境は人にとっても大きな作用を及ぼすのかな，と思った」（問2，学生 #10）
- ・「個人の自由」に対する考え方が根本的に異なるのではないか。コミュニティが守るべきルールに対する思考の過程（重んじる点）が違うので，このような議論になるのではないか（問2，学生 #14）。

学生の記述から，web形式の対話では，手紙形式とは異なり，文章では伝えられない細かいニュアンスを伝えることができるため，相互の理解を深める一定の効果があることが示唆された。しかし，web討論における学生の対話スタイルは，手紙を用いた対話の場合と同様に，自文化内で典型的に共有されている信念を相手に説明し，それを理解してもらおうとするものであり，対話を重ねることによってむしろ文化の違いを固定化してしまうものになっていた。

異文化理解の鍵となる情動反応

学生を文化間の違いを固定化する対話スタイルにとどめているものは何なのだろうか。交流授

業における学生の記述にはこの問題を検討するためのヒントを見いだすことができる。中国とのやり取りにおいて学生は，合理的な理由を示すことができないにも関わらず，車内での通話を許可することに対する反対の姿勢を維持し続けていた。

【日本の学生の感想例7（抜粋）】

（個人用シート③）

また，中国の学生に指摘された日本の矛盾（デパートも公共の機関なのでは？通話するのも会話するのも同じなのでは？という矛盾）に気づき，確かにそうだなと納得しました。「当たり前」の中にいると絶対に気付かない矛盾だなと思いました。でも確かに矛盾しているけれど，私は電車などで電話をしようとは思わないし，デパートなどで通話を制限しようとも思いません（学生 #2）。

このような頑なな自説の維持は，相手に指摘された矛盾が合理的なものであっても，悔しいのでいまさら立場を変えられないという思いによるものとも考えられる。しかし，事前アンケートやその後の学生の記述にみられた「通話されると煩わしい」「周りの人に不快をもたらす」といった感想や，事後アンケートにみられた以下のような学生の記述は，車内での通話を控えることに固執する日本の学生の姿勢が，「車内で通話をされることが嫌い」という否定的な感情に大きく影響されていることを示唆する。

【日本の学生の感想例8】

（事後アンケート）

- ・「あたり前と思っていたことに突っ込まれて，言い返すのが難しいことに驚いた。でもやっぱり静かな方がいい」（学生 #12）
- ・「自分達がどうして携帯電話を公共機関

では使用しないのかについて、そこに国民性が表れていることに気づいた。～だから「マナーを守る」のではなく、～が嫌いだから「自分を守る」という方が大きいように感じた」(学生 #7)

中国とのやり取りにおいて日本の学生は「ペースメーカーを装着している人への配慮」や「他者に対する気遣いを重んじる日本」といった理由づけを試みていた。だが、それらが十分な合理性を持ち得ないことを中国の学生に指摘されても、なお車内での通話は許可すべきではないと主張し続けていた。このような合理的根拠を欠いた態度の維持は、「車内で通話をされるのは不快」という情動的な反応と、自身の判断に合理的な根拠を与えようとする論理的思考との葛藤のなかで生じたものであると考えられる。交流授業の終盤で学生が試みた習慣や国民性という表現を用いた説明は、こうした容易には拭いきれない個人の情動的反応の影響を察知した学生が、それを日本という文化的集団の枠組みを用いてより安定的に語ろうとした結果として生成されたものではないかと考えられる。

異なる文化との対話により生じる認識の変化

本交流授業における中国とのやり取りの過程で、学生の視点は自文化を基点として相手文化を理解しようとするものから、行為の背景にある文化的信念の相対性を尊重して相手と対話をするものへと変化していった。文化的信念の相対性を理解し、それに基づいて異文化の相手との対話を進めていこうとする姿勢が生まれたことは、本交流授業の重要な成果であったと思われる。しかし、ここでの文化的信念の相対性の理解は情動的反応と結びついた習慣や国民性の違いの認識というレベルにとどまるものであった。

本授業実践では時間的制約からこの段階で交

流を終了せざるを得なかったが、このままさらに日中の交流を継続していった場合、学生の認識にどのような変化が生じることが期待できるであろうか。

Bennett (2004) は、文化的相違をどのように受け止めるのかという視点から「異文化感受性モデル」を提案している (Bennett & Bennett, 2003)。このモデルでは、異文化感受性は、自文化中心主義的段階から文化相対主義的段階へと次の6つ段階を経て発達していくと考えられている。6つの段階とは、1. 否定、2. 防衛、3. 最小化、4. 容認、5. 適応、6. 統合である。最初の3つの段階は、自文化中心主義的な段階であり、文化的相違は存在しないと考える段階(否定)から、文化的な相違に対して防衛的になる段階(防衛)を経て、自分の生活に対する文化的相違の影響は最小化しようとする段階(最小化)へと移行する。その後、文化相対主義的な3つの段階へと進み、文化的相違の行動的徴候や文化的価値観を尊重する段階(容認)、文化的相違に順応し、異文化の人々と意思疎通してつきあっていくためのスキルを身につける段階(適応)、複数の考え方を基準にして文化的相違を評価する段階(統合)の順で移行していく。本交流授業でみられた、学生の意識の変化はこのモデルによく当てはまると考えられる。つまり、車内では通話しないのが当たり前であるという交流前の学生にみられた自文化のみを考慮する態度は、Bennett のモデルにおける「否定」の段階にあたり、その後の交流を経て、日本と中国は異なる価値観を持っているがどちらが良いわけでも悪いわけでもないとする「容認」の段階へと移行した。この点において本交流授業は、学生の異文化理解にある程度の効果をもたらしたと考えられる。では、その後の「適応」や「統合」の段階へと学生の認識を変化させていくためには、どのような形で交流を展開していく必要があるのだろうか

か。

発達初期の段階からコミュニケーションと情動が密接に結びついていることは以前より指摘されてきた（例えば、Saarniら, 2006）。本交流授業でも、異文化に対する情動反応（特に、否定的なもの）とそれに結び付いた習慣といった説明が、学生の認識を「容認」の段階に引き留める原因となっていることが示唆された。このような学生の認識の停滞を解消するためには、学生が自身の情動により明確に気づくことが有効かもしれない。これによって学生は、相手の行為が「悪いとはいえない」ことが分かっているにも関わらず拒否感や嫌悪感をもつことに対して、認知的不協和を経験することになるだろう。その結果として、学生がさまざまな角度から事態の再解釈を試み、相手の行為をより受容的に理解するための新たな解釈フレームを自発的に構成していくことが期待できる。本授業でみられた習慣という学生の解釈は、このような再解釈のはじまりであると考えられる。異文化との対話を通して学生が新たに構成する解釈は、学生個人の信念や情動に異文化の信念を無理のない形で組み込んだ、より柔軟なものになるだろう。もちろん個人の信念はそれぞれの文化に方向づけられたものではあるが、集団間の対話の過程で生み出された新しい信念は、各文化のメンバーが典型的にもつ信念体系の枠を超えたものとなる。その結果として、対話共同体を構成する2つの文化を内包する「異種混濁的な新たな文化」が創発することも期待できるかもしれない。このような新たな文化は、学生が異

なる他者との関係を築いていくための基盤となり、さらには異質な集団に対してより受容的、適応的な形へと両文化の信念体系を変化させていくことにもつながるだろう。

注

- (1) 本国際共同プロジェクトは、科学研究費補助金基盤研究(B)（研究代表：呉宣児）の交付を受けて行われた。

引用文献

- Bennett, J. M. & Bennett M. J. (2003) Developing intercultural sensitivity. An integrative approach to global and domestic diversity. In D. Landis, J. Bennett, M. Bennett (Eds.), *Handbook of intercultural training* (pp. 147-165). Thousand Oaks: Sage.
- Bennett, M. J. (2004). *Becoming interculturally competent*. In J. Wurzel (Ed.) *Toward multiculturalism: A reader in multicultural education* (pp. 62-77). Newton, MA: Intercultural Resource Corporation.
- 伊藤哲司・山本登志哉 (2011) 日韓傷ついた関係の修復：円卓シネマが紡ぎ出す新しい対話の世界2 東京：北大路書房
- 呉宣児・高木光太郎・伊藤哲司・榊原知美・余語琢磨 (2012) 対話共同体への参加を通じた集団間異文化理解の生成(1) —日本, 中国, 韓国, ベトナムの大学を結ぶ対話型授業実践を通して— (自主シンポジウム) 第23回日本発達心理学会大会論文集, 20-21.
- Saarni, C., Campos, J.J., Camras, L.A., & Witherington, D. (2006). Emotional development: Action, communication, and understanding. In N. Eisenberg (Ed.) *Handbook of child psychology, vol 3* (pp. 226-299). New York: John Wiley & Sons, Inc.
- 山本登志哉・伊藤哲司(2005) アジア映画をアジアの人々と愉しむ—円卓シネマが紡ぎ出す新しい対話の世界 東京：北大路書房

Process of Intercultural Understanding through Dialogue between Japanese and Chinese University Students

Tomomi SAKAKIBARA (Tokyo Gakugei University)

Chengnan PIAN (China University of Political Science and Law)

Kotaro TAKAGI (Aoyama Gakuin University)

Abstract

The purpose of this study was 1) to implement classes at Japanese and Chinese universities where students participate in intercultural dialogue through exchanging letters, and 2) to examine the process by which Japanese students develop their intercultural understanding by participating in these classes. Twenty-two Japanese and six Chinese university students participated in three classes separately. In the classes, students were given a dialogue theme that focused on cultural differences. Students wrote their opinions individually on a work sheet, discussed their opinions in small groups, and wrote letters to their counterparts. Through an analysis of the Japanese students' writings, it was found that their understanding of the different cultural values and beliefs changed from one based only on a Japanese cultural perspective to one respecting the relativity of cultural beliefs. From the results, it is suggested that the arousal of students' negative emotions in response to their exposure to different cultural values and beliefs is closely related to their understanding of cultural relativity.

Key Words : intercultural understanding, university students, Japan, China, intercultural dialogue